

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

イタリア通信 ⑮

* 移民とイタリア人一融和への長い道のり *

深草 真由子

「海で溺れる者を見放してはいけない」という漁師たちの掟と、不法入国者との接触を禁止するイタリアの法律。シチリアの南西に位置する小さな島を舞台に、海上で難民を救助した家族の葛藤を描いた映画『海と大陸』(原題: Terraferma、エマヌエーレ・クリアレゼ監督)を見た方はいるだろうか。ヨーロッパへ向かうために地中海を渡るアフリカやシリアの人々は、チュニジアから 130 キロほどの距離にあるイタリア最南端、ランペドゥーサ島を目指す。しかし、海を漂流し命の危険にある難民らを、漁業従事者や観光客が救助して岸へ運ぶと、彼らは密入国幫助の罪に問われることになる。



【2013年春に日本でも公開された
イタリア映画『海と大陸』】

10月3日早朝。518人の難民(多くはエリトリア人)を乗せた船がランペドゥーサ沖で故障、SOS

を出すための火が毛布に燃え広がったことが原因でパニックが起き、船は転覆、16人の幼児と10人の妊婦を含む363人が溺死した。この時も観光客が溺れる難民をたまたま見つけて救助、通報したのだが、生存者の証言によれば、見て見ぬふりをして通り過ぎた漁船もあったという。イタリアではこの過去最大級の事故をきっかけに、ランペドゥーサ島の現状や国としての対応のあり方が議論された。しかし、海上で難民と接触した者に罪を問うか否か、不法滞在を犯罪と見なすか否かといった問題も、難民輸送によって巨利を得る闇組織の取り締まりや、そもそも彼らの祖国における紛争や圧政、貧困の解決につながるわけではない。さらに難民たちの目指す国はイタリアとは限らず、ヨーロッパの他の国々であったりするわけだから、EUと中東、アフリカを巻き込む、気の遠くなるほど大きく複雑な問題である。

ランペドゥーサの悲劇の最中に見聞きしたコメントの中で、気になったものがいくつもあった。それは例えば、「私の家族は事業に行き詰まり、一週間も車中で寝る生活を強いられたのに、不法入国のアフリカ人には無償で寝床が与えられるなんて」「生き残ったランペドゥーサの難民たちは食事の配膳サービスまでも受ける”客人”で、自分たちで食卓の準備をする必要もないとは、いったい何様のつもり?」「路上で物を売ったり金をねだったりする黒人やインド系と仲良くなったりするから、彼らの間でイタリア人は親切だと評判が立つ。こ

の評判に釣られてまた難民がイタリアにどっと押し寄せる。その旅の途中で命を落とす者もいる。つまり彼らに優しく接する“人道主義者”たちの浅はかな善意が一連の問題の発端なのだから、いっそのこと今後イタリアは差別主義国としてやっていくほうが良いのでは。…」といったもの。しかし、本当にそれでいいのだろうか？そもそも戦争や貧困、環境汚染などで生存が脅かされていて、その問題を解決するのが困難なとき、より良い生活を求めて別の土地へ移動する者が現れるのはごく自然な成り行きである。イタリア人だって明日は我が身かもしれないし、実際過去にはそうしてきたではないか。フランシスコ教皇はピエモンテからアルゼンチンに渡った家庭の出身である。次期ニューヨーク市長のデブラシオ氏もアメリカに移住した南イタリア人の孫である。



【ランペドゥーサ島へ上陸する難民たち】

今、イタリアでこれほどまでに移民に対する風当たりが強いのは、失業率の高さに加えて、コンゴ出身で黒人のセシル・キエンジュ移民融和担当相が JUS SOLI(出生地主義、つまり出生児は出生地の国の市民権を得るという原則)を採用する法案を取りまとめていることが、移民受け入れ反対派の強い反発を招いているからである。また、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の報道官としての経歴をもつ、下院議長のラウラ・ボルドリーニが難民の人権尊重を訴える発言を繰り返していることもあるだろう。「移民はわれわれの時代のもっとも現代的な表出である。資本も思想も情報も人間も、何もかもが国境を越えて移動する時代にあって、移民はグローバリゼーションによって生じる現象であり、それが未来の人間の生き方

であるならば、移民たちは未来の前衛である」。週末の人気トーク番組で、ボルドリーニが発した言葉である。

知性や労働力の担い手としての移民。そして異文化、異なる世界観をもたらす者としての移民。一方、厄介者あるいは侵入者、脅威としての移民。よそ者にオープンとは決して言えないイタリア社会で、移民の子どもたちはどうしているのだろうか？現在イタリアの公立学校に通う生徒の 9 パーセントが外国人ということだから、一クラスに二、三人は外国人がいることになり、その国籍はルーマニア、アルバニア、モロッコが上位を占めている。外国人生徒の割合は北イタリアでより高く、トスカーナのプラートでは中国人、ジェノヴァではエクアドル人が多いといったように、状況は地域によってまちまちである。外国人の子どもたちは、たとえイタリア語をまったく話すことができなくても、担任らのサポートを受けながら、イタリア人の子どもたちと同じクラスで学習している。

Giuseppe Caliceti 著、「Italiani, per esempio— L'Italia vista dai bambini immigrati (Feltrinelli, 2010)」は、レッジョ・エミリアの小学校教員である著者がこれまでに受け持った外国人生徒たちによる作文を一冊にまとめた文集である。子どもらしい純粋な発想に思わず微笑みたくなったり、鋭い観察力で難しいテーマを論じる文章を見つけて感心したり、またイタリア語の拙さが明らかな作文(“io piace”といった間違いが散見されるものや、動詞が常に原形で使われているもの)もあって、子どもたちのおしゃべりを実際に聞いているような気分になり、読むのが楽しい。だがここからも、イタリアにおける移民たちの難しい実情が否応無く見えてくる。

「イタリア人全員が知るべきだとぼくが思っていること。ぼくみたいに、男の子や女の子がある場所で生まれて、別の国で暮らすためにその場所を離れないといけないとき、それはと一つでも大変なことなんだ。ぼくはできることなら離れたくなかった。誰でもそうなんだよ。だって世界中の人はみんな、生まれた土地で死にたいと思っているんだから」(8歳、モロッコ)。「ぼくのお父さんのイタリア人の友達は、『もしお前のような外国人ばかりになったら、この国は俺たちの国ではなくなる』

と言う。でもぼくにとって国はいつまでも同じままだよ。場所も国もじっとして、動くわけじゃないんだから」(9歳、パキスタン)。「イタリアには、外国から来た男の人や女の人、子どもたちを憎む人がある。特にアルバニアから来た私たちのことは、泥棒だと言って憎む。イタリア人がこう言うのは、私たちが貧乏だから。それに金持ちは貧乏人のことをいつも怖がるもので、何か盗まれるんじゃないかと心配している。だけど貧乏人全員、アルバニア人全員が泥棒というわけじゃない。でなければ一体どれだけたくさんの泥棒がいることになるの」(8歳、アルバニア)。「人種差別主義者とは、外国で生まれてイタリアに来た人たちのことを嫌い、『国に帰れ!』と言う人たちのこと。そうやって彼らは自分が偉いと思っているようだけれど、それは違う」(9歳、モロッコ)。「アフリカ人が近所に暮らしていても、私にとっては迷惑でもなんでもない。そう思うのは、私の両親がアルバニアで生まれたからというわけじゃない。むしろ、肌の色の違う子、違う国から来た子、目の色や髪の毛の色が違う子でクラスが少しカラフルになったらいいのになあと思う。そうしたら、私のクラスは有名で重要なクラスになる気がする」(10歳、アルバニア)。移民の子どもたちの声は、イタリア人の耳に届いているだろうか。



【移民融和担当大臣のセシル・キエンジュ】

(当館元職員)

イタリアンレストラン紹介

～南森町～
トラットリア

トラットリア シェル

大阪では数少ないシチリア料理専門店として今年5月にオープンしたばかりのお店です。魚介類など新鮮な食材を活かした料理は日本人にもなじみやすいものばかりです。

現地から直輸入の食材も使った料理の数々をぜひご堪能ください。

特典: (日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
グラスワインもしくはワンドリンクサービス
(ディナータイムのみ)

住所: 大阪市北区南森町 2-1-18

ジャスティス南森町 1F

電話: 06-6367-2020

HP: <https://www.facebook.com/shiota.shell/info>



【カジキマグロのアグドルチェ】



【イワシのパスタ】

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑱』

～“ジロの聖地” モルティローロ峠～

谷口 和久

●モルティローロ峠 ～地理と歴史～

ミラノから北に、コモ湖の脇をすり抜けてアッダ川をさかのぼっていくと、ヴァルテッリーナ渓谷という、アルプスの山々に囲まれた渓谷地帯にたどり着く。渓谷とはいっても、日本でよく見られるようなV字型に深く切れこんだ暗く狭いものではなく、アルプスの氷河によってえぐり取られたU字谷とよばれる、広々として見通しのよい谷間を形成している。

スイスと国境を接するこのエリアは、山深い土地ではあるが、一説には古代ローマの時代からワインぶどうを産していたことから、古くからひらかれた土地であることをうかがわせる。氷河によってカンナのように削られた急峻な斜面には、いったいどうやって開墾したのかと驚嘆したくなるようなぶどう畑がえんえんと続いており、その陰しい風景と厳しい気候を体現したような飲みごたえのあるワインを産出している。ラインアップの中には D.O.C.G.(イタリアワインの等級で最上級のもの)に認定されるほどの上質のワインもある。

このヴァルテッリーナ渓谷の東の端に、モルティローロ峠 Passo del Mortirolo (標高 1852m) という細くて人通りの少ないさびれた峠道がある。この峠の周辺には、より便利で車の運転もしやすい峠道がいくつか通じているので、交通上の重要性があるようには見うけられない。日頃は地元の農作業車くらいしか通ることがなさそうな道である。



【モルティローロ峠の頂上】

実際、モルティローロ峠が舗装されたのは、1980年代に入ってからのこと。それも、交通のためではなく、自転車レースのために。そう、この峠は自転車レース、ジロ・ディ・イタリアの舞台として用意されたといっても過言ではないのだ。

峠道そのものは舗装されるはるか昔から通じていたようで、峠の西側にはささやかな牧草地帯が広がっており、牛を引き連れたりあるいは地元の農民が農産物を流通させるために開いた道だったのだろう。イタリア北部の山岳地帯は、ハプスブルグ家のオーストリア＝ハンガリー帝国やナポレオンのフランスなど、時代ごとに支配者が入れ替わり、国境線がひんぱんに動いたこともあって、イタリア統一の頃にナショナリズムに目覚めたイタリア人が自らの名を刻むようにあちらこちらに道を切りひらいた。モルティローロもそのような道のひとつだ、という説もある。

今はおだやかな景色の広がる峠の周辺だが、第二次世界大戦の末期、対独戦がもう終わりに近づこうかという頃、パルチザンとサロ共和国軍(ドイツの傀儡政権)・ドイツ軍による交戦が繰り広げられた。双方2千～3千もの兵力がこの狭い山域に投入され、戦いは1カ月にも及んだ。その間にムッソリーニはコモ湖付近でパルチザンに捕えられ銃殺、ヒトラーはベルリンの地下壕で自殺を遂げ、彼らの死から数日後にはモルティローロの戦闘も終結した。欧州戦線における戦闘としては、ほぼ最末期のものに数えられる。

●ジロ・ディ・イタリアの聖地へ

モルティローロが舗装されたのは1980年代と先に書いたが、この時代はロードレースがより先鋭化し、より厳しいコースが求められた時代でもあった。ツール・ド・フランスでも、それに先立つ70年代後半に、それまで20年あまりものあいだ忘れ去られていたラルプ・デュエズという急峻な登りコースが復活。以降、数々の名勝負の舞台となり、今では「ツールの聖地」と称されるほどになった。ちなみに、ラルプ・デュエズが初めてツールの舞台となったのは1952年のこと。その時、このステージを制したのは“Campionissimo”ファウスト・コッピである。

ツールに負けじと急峻なコースを探していたジロの主催者は、モルティローロに目をつけた。頂上近くまで木々におおわれているので、風景の陰しさ・フォトジェニックさではラルプ・デュエズや同じイタリア国内のガヴィア峠などにゆずるが、斜

度が半端ではないのだ。峠西麓の村トーヴォ・ディ・サンターガタから測ると、平均斜度で 11%、最大斜度はなんと 22%にもものぼる。ちなみに斜度の「%」とは、水平距離 100m あたり 1m 登ると斜度 1%、10m 登ると斜度 10%という計算になる。

ツール7連覇(ただし薬物摂取により後に剥奪)のランス・アームストロングをして「とんでもない坂だ。こんな坂は登ったことがない」と言わしめたほどの登り、それがモルティローロである。

モルティローロがはじめてジロの舞台となったのは1990年のことであるが、その名がロードレースの歴史に刻まれることとなったのは1994年、マルコ・パンターニがこの峠を制した時からである。

この年のジロは、それまでジロ2連覇を果たしていたスペインの王者ミゲール・インデュライン(ツール5連覇を果たした唯一の選手)と、ロシアの新星エフゲニー・ベルズイン、それと当時まだ無名に近かったマルコ・パンターニの3人が、文字通り三つ巴の戦いを繰り広げたのだ。



【右からインデュライン、ベルズイン、パンターニ】

西麓のマツォ・ディ・ヴァルテッリーナから登りにかかる時、まだ峠の頂までかなりの距離を残した地点で早々にパンターニがアタック。一定ペースで登りをこなすことを信条としているインデュラインは無理に追うことはしなかったが、マリア・ローザ“Maglia Rosa”(総合トップの選手が着るピンク色のジャージ)をまとっていた若いベルズインはパンターニのアタックに反応。しかしながら、10%を超える激坂で強烈なアタックを繰り返すパンターニになすすべもなく、次第に引き離されていく。峠をトップで通過したパンターニは、麓でインデュラインに追いつかれたものの、ゴールのアプリーカへの登りでインデュラインの苦しい表情を見てとって、猛然とスパート。見事ステージ優勝を手

中におさめたのだ。この時のテレビ視聴率は50%を超え、この数字はサッカーや F1 など他のスポーツをおさえて年間トップとなった。

●モルティローロ挑戦！

この5月に筆者はヴァルテッリーナを訪れた。目的はもちろんモルティローロ峠を自転車で登ること。無謀な計画である。

今年の春は、イタリアに限らないが、天候が不安定だった。筆者が訪れたよりも遅い時期に、この近辺でジロのレースが行われる予定だったが、降雪のため中止になるほどであった。幸い滞在中は雪に降られることはなかったが、到着した日は終日冷たい雨が降っていた。トーヴォ・ディ・サンターガタの宿の女将に「明日の天気はどうだろう？」と尋ねたら、「さあ、わからないわねえ。コロコロ変わるからね“variabile”」と、至極もつともなことを言われた。

翌朝、起きてみると、まだ雨は残っている。しかしながら、山の向うを見ると、わずかながら雲のすきまが見えてきている。「行けるところまで行ってみよう」。そう決めると、着替えて自転車をセットし、出発することにした。

マツォ・ディ・ヴァルテッリーナから登りにかかる時、農家の私道のような裏道をすり抜けていくのだが、そんなところから早くも 10%を超える斜度となっており、行く先が思いやられる。ちなみにパンターニがこの峠を制した時の平均時速は 17km/h。前述のラルプ・デュエズは 25km/h で登り切っているのだから、モルティローロがいかにきついか、おわかりいただけるだろう。

日本の山間部のような森林帯がしばらくは続くので、景色はおだやかであるが、坂はおだやかではない。見上げても、視界にはほとんど道しか目に入らない。傾斜があまりにも急で、壁のように立ちだかっているからだ。歩くのとほとんど変わらないスピードで、自転車を引きずり上げるような感じで、ズリズリと登って行く。

斜面なかばで視界が広がる。牧草地帯に出たのだ。アルプスの少女ハイジで見たような、のどかな景色が広がる。丸太小屋の脇に湧水を見つけ、これ幸いと一息つかせてもらった。もとより、足をつかずに頂上まで行くつもりはなかったのである。

しばらく進むと、山腹に大きなモニュメントが掲げられている。モルティローロで、自らの名を自転車レース史に刻んだマルコ・パンターニの像であ

・・・会館だより・・・

る。この像は、パンターニがリミニで非業の死を遂げた後、2006年に彫刻家アルベルト・パスクアルによって制作されたものである。彫像のパンターニは顔をゆがめ、必死にペダルを回している。苦痛に満ちたその表情は、彼の一生を思い起こさせ、胸ふたぐ思いだ。



【パンターニの像】

頂上が近づくと、傾斜も若干ゆるくなってくる。頂上の100mほど手前から道の上に雪が残っていたが、かまわず進んでいく。レースの時には幾重にも人垣が続くのだろうが、今は人っ子ひとりおらず、静かな時間が流れている。レースの時間が特別で、日ごろはこんな感じなのだろう。ただ、あまりの寒さに、いつまでも余韻にひたっているわけにもいかない。雨は途中からあがったものの、まだ怪しげな雲がそこかしこに流れている。次回は夏に訪れて周辺の峠もめぐることしようと思いつつ、登ってきた道を引き返すことにした。

[参考資料]

『現代イタリア史』(山崎功, 岩波書店, 1955)
『イタリア現代史』(森田 鉄郎, 重岡 保郎, 山川出版社, 1977)
『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也, 未知谷, 2009)
『フォト! フォト! フォト!』(砂田弓弦, 未知谷, 2001)
『ジロ』(砂田弓弦, 未知谷, 2002)
『ジロ・ディ・イタリア 薔薇色の輪舞』(砂田弓弦, 八重洲出版, 2010)
『マルコ・パンターニ 海賊の生と死』(ベッペ・コンティ, 工藤知子訳, 未知谷, 2009)
『サイクルスポーツ2004 年7月号別冊2004ジロ・ディ・イタリアのすべて』(八重洲出版, 2004)
『テクリスティ2004 年5月号』(飛鳥新社, 2004)
Davide Cassani e altri, *Vai, Pantani*, Mondadori, 2006
Pier Bergonzi & Giuseppe Castelnovi, *100 anni di Giro*, Vallardi, 2009
www.cyclingnews.com 関連情報
wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 京都本校: 日本イタリア会館
1月6日(月) 11時~12時30分
1月11日(土) 13時~14時30分
- ウイングス京都: 四条烏丸
1月7日(火) 19時~20時30分
- 大阪梅田校
1月6日(月) 13時~14時30分
1月6日(月) 19時~20時30分

スペイン語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期スペイン語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 京都本校: 日本イタリア会館
1月11日(土)11時~12時30分

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

- 京都本校: 日本イタリア会館
1月8日(水) 13時~14時30分

12月29日(日)~1月5日(日)は
冬休みの為休館となります

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/